

ハンブルク大学の社会貢献

ハンブルク大学アジア・アフリカ研究所教授

ローラント・シュナイダー

Roland Schneider

私は、この研究会におきまして、ある非常に複雑なテーマ、すなわち社会に対するハンブルク大学の貢献についてお話することとしましょう。

はるか昔、最初の大学創立以来、大学の共同社会的な役割について議論されてきたのは当然のことであり、大部分の初期の大学（イタリア、プラハなど）は、学問に対する純粋な愛からではなく、共同社会的な期待に基づいて設立されました。これは言うまでもないことであります。

私は、この短い発表時間で、第一に、ハンブルクに精神を集中し、第二に、テーゼのように短く、簡潔過ぎるかもしれませんが、大学の社会貢献に対するハンブルク大学の展望について述べます。

この展望は、私が4ヶ月前に大阪市立大学における研究会で紹介しました Dohnanyi 委員会の要求や経済の要求に対する回答として形作られました。

これにつきまして、以下、私は簡潔に報告し、テーゼのように述べてまいります。

大学は、国家によって支持され、また共同社会、つまり納税者によって資金を提供されている機関として、お返しをしなければならないことはいうまでもありません。一般的には、大学に対しては研究と教授が期待され、この研究と教授の両者は、共同社会に奉仕すべきです。研究の場合は、これは誰にも明白であります。世間ではたいてい、実践に方向

づけられた教育のみが価値があると見なされます。また、教授の場合には、主として特定の職業（教師、弁護士など）のための学生に対する教育、あるいは職業生活のための専門家養成が期待されます。

これはハンブルク大学の場合も、まったくその通りであります。この期待は、春に Dohnanyi 委員会の専門家報告を通じて、経済の要求の方向に一方的に変えられました。これに対して大学は、2003 年 5 月、「卓越性と多様性」のモットーの下に「未来プログラム」を作成しています。

私はここで、簡潔な解説とともに、その基本的テーゼを挙げることにします。

- ・ 分別ある人間の教育（形成）
- ・ 学問的後継者の育成
- ・ 学問と実践の媒介
- ・ 人類の幸福、そして公的・共同社会的な課題の実現への学問的な任務遂行

より具体的に、ハンブルクにより関連したことを挙げていきます。

1) 大学の発展を、ハンブルクとその周辺地域全体の需要に方向付ける。

ハンブルクの人口は 170 万人しかありませんが、実際には、周辺に大きな大学が存在しませんので、社会の基礎的な施設面と教育の面において、400 万人に対して責任があります。

2) 経済構造的、社会文化的な変革に対する考慮。すなわち変化している職業の要求（研究者の需要、国際化）

3) 都市の経済的重点を考慮する。

生活科学、ナノテクノロジー、光学的技術、IT、内容におけるメディア、中国・アジアと同様に地域としてのバルト海地方。

4) 都市イメージに対する貢献としての国際化

国際的な互換性を持つ卒業資格、外国の学生に対して魅力を高めるよりよい条件、外

国の教授の招聘

5) 教師教育の強化

6) ハンブルク全体のための精神科学、文化学、言語学の多様な使用

メディアの中心地としてのハンブルクは、精神科学と言語において多様な専門性を必要としています。

7) 言語学、文化学の領域では、ハンブルクは 90 以上の領事館、他の国際的な機関（海外

の研究所）との共同研究が可能であり、大学のために専門家を教育することができ、ハンブルクは海外貿易で利益を得ることができます。

8) 中心的地域における学問的発展に対する自然科学の利用

9) メディアの街ハンブルクのための、メディア、コミュニケーション科学の拡充

これらを実現するために、一方で、都市もそれに貢献します。政治がハンブルクの優位を形づくる時（たとえば China-gate）、それに関連する専門科目（ここでは具体的には中国学）を、一般的な節約措置、人員削減計画から除外して、支援しなければなりません。

大学は今日、その創設時のように、教育、研究、職務遂行について貢献することができます。しかしこのことは、その学問的独立の保持とその本来的な機能、つまり研究と教授の機能に注意を払いながら、なされなければなりません。

大学は、絶え間なく変化する経済市場の要求のために振り回されてはいけません。大学はまた、象牙の塔にとじこもるのではなく、自分自身の利益のため、そしてとりわけ学生のために、絶え間なく評価と点検を通じて、大学の共同社会的な義務、共同社会に対する貢献を見失わず、注意を払っていかねばならないのです。

ご清聴ありがとうございました。